

ドール沼へようこそ！

二〇一〇年太陽系第三惑星地球。

地球と言っても『ちきゅう』と読んではいけない。地球は『ちたま』と呼ばれる星で、地球が浮いている銀河系の双子銀河にある双子星である。

第一章 七海の場合

ある休日前夜、夕食も入浴も済ませ、パジャマ代わりのTシャツとハーフパンツを穿いた女性が、家の居間でソファに座りノートパソコンを覗き込んでいた。

パソコンのディスプレイに表示されているのは、人形の写真が並んだSNS。

このSNSに登録している女性、桑原七海くわはら ななみはかねてから人形仲間とオフ会をしたいと思っていた。

SNSのトピックスでは、時折オフ会の参加者募集がかかっている。けれども七海は、今まで参加出来ずに居た。

年齢が問題めづなのでは無い。七海は学生ではあるけれども、既に成人だ。それでも、躊躇ためらう理由がいくつか有った。

一つは、他のSNSで初めてオフ会に参加した時、質の悪い人が居た為怖い思いをした事が有った事。

もう一つは、人形のオフ会と言っても、人形自体の種類が多岐にわたる為、言い方は悪いが派閥のような物が出来てしまっていて、なかなか

馴染めそうに無い事。

勿論、人形愛好家皆が皆頑かたくなな訳でも無いし、悪い人ばかりな訳では無いのもわかっている。

それでも、何となく壁を感じてしまつて、SNSで企画されているオフ会にはなかなか参加出来ずに居た。

今日も、先日行われたというオフ会のレポートをSNSで読み羨ましく思っている。

楽しそうな画像付きレポートを見ている内に、溜息が出た。

「私もオフ会行きたい。でも怖いよ……」

思わず泣き言が口を突いて出たその時、玄関が開く音がした。

ただいま。と言う声と共に玄関から入って来たのは、ゲーム会社に勤めている姉の琉菜るな。

忙しい時は帰ってきててもよれよれになっていてベッドに直行する琉菜だが、今日は余裕が有るらしく、鞆をソファの脇に置き、七海の隣に座つてこう訊ねてきた。

「どしたん？」

なんか元気ないけど、またネットで変なのに引っかかった？」

どうしたと訊いてきては居るが、琉菜はあくまでもノートパソコンのディスプレイは覗き込まない。

そんな琉菜に、七海は事情を説明する。

オフ会に参加したいが、なかなか参加する勇気が無い事と、その理由。

しょんぼりと語る七海の話、琉菜は頷きながら丁寧に聴く。

愚痴や弱音が混じった七海の話を聴き終わった琉菜が言う。

「よし、じゃあ七海がオフ会企画したら良いじゃ無い」

その言葉は、七海にとって予想外の物だった。

「え？ でもお姉ちゃん、私オフ会の主催なんてやった事無いし、お店とか予約するお金も無いし……」

「大丈夫！ 誰だって最初は初めてだよ」

そう言う物だろうか。しかし琉菜に大丈夫と言われても、七海はすぐにオフ会を自分で開こうという考えにはなれなかった。

七海の様子を察したのか、琉菜は幾つか案を出す。初めてオフ会を主催するのに、どうしたら良いか。その案だ。

琉菜から提示される案を聞き、七海もそれならこうした方が良い。と言う意見が少しずつ出せるようになってきた。

そうして二人で話す事小一時間。気がついたら七海はオフ会を主催する気満々になっていた。

「オフ会参加者の条件は……」

一頻り話が終わり、琉菜がお風呂に入っている間、七海は早速SNSにトピックスを立ててオフ会参加者の募集記事を書いていた。

琉菜と話合った結果、一定の条件を守れる人のみに参加して貰った方が良くと言う事になり、その条件を書き込んでいる所だ。

その条件とはこう言った物だった。

一つめは、どの種類の人形を持っていても許容出来る事。

二つめは、ナンパ行為の禁止。

三つめは、他の参加者が嫌がるような事は控える事。

トピックスにこの条件を書き込んでいた七海は、ふと、これは当たり前的事などには無いだろうか。と思ったのだが、この当たり前の事が出来ない人が存在するから今までオフ会に行^かくのを躊躇っていたのだ。

条件を書き込み、次に書くのはオフ会の概^{おおよ}要。

今回は未成年でも気軽に参加出来るよう、飲み屋や、飲食費が高額に

なってしまう飲食店は使用しない。

その代わり、公営の公園でブルーシートを敷き、各人食べたい物を持ち寄って、撮影よりも交流をメインにした物にする予定だ。

この場合、雨が降った時の事を考えなくてはいけないのだが、七海は昔から良く通っている公園で、無料の休憩所が併設されている所を使えば良いだろうと、そう考えていた。

休憩所のキャパシティが足りるかはやや不安だが、初めて開催するオフ会にそこまで人は集まらないだろう。

「おほっふ。テンション上がってきた」

トピックスにオフ会の概要を書き終えた七海は、興奮冷めやらぬと言った様子。

暫くSNSに載っている新着の人形写真を見ていたが、ソワソワしながらノートパソコンの電源を切り、自室へと行く。

扉を開け部屋の電気を付けると、机の上に塗装用のブースとエアブラシ、レジンが注がれたシリコン型、それから分解された人形の頭が置かれていた様が目に入る。

「このカスタムっ子完成させて、オフ会に連れて行こう！」

オフ会は一ヶ月先。しかも、今募集をかけ始めたばかりで参加者が集まるかどうかもわからない。けれども、七海は初めての人形オフ会に期待を膨らませたのだった。

それから三週間ほど経ち、募集を締め切った頃。オフ会参加者募集のトピックスには、五人ほどの参加希望者の書き込みがあった。

「五人か」。

これくらいなら、当日雨が降っても休憩所の中に入りきるかな」

初めての主催の割にはなかなかの応募人数だと思いながら、七海は参加希望者に当日の詳細と、緊急連絡先をメールで伝える。

そうしている間に、玄関を開ける音とただいま。と言う声が聞こえてきた。

三日ぶりに帰ってきた琉菜にオフ会の現状報告をしようかと一瞬思ったが、いかにも疲れた様子で自室に向かう琉菜を見て、これは寝かさないと駄目だと思い、七海はノートパソコンに向き直った。

オフ会の事務を頻り終えた七海は、ノートパソコンを閉じ、自室で

人形の服を着せ替えていた。

華奢な体に、大きな頭の人形。七海はこう言った人形を何体も持っているが、その内数体は自らカスタムを施^{ほどこ}していた。

ウィッグを変えるだけでは無く、目を取り替えたり、自力でメイクをしたり、場合によっては口元を少し削っていたり、なかなか力の入ったカスタムだ。

「オフ会に連れてくのはこの子と、他誰にしよう。

あんまりいっぱい連れていくのは大変だし、場所食っちゃうからなあ」ふと、背の低いタンスの上に並んだ人形を眺め、七海は難しい顔をする。

出来れば全部持って行って、オフ会に来る人達に見せたい。

けれどこの物量を持っていくのは大変だし、持って行けてもこの人形だけでブルーシートの大部分が埋まってしまう。

それに、どのタイプの人形でも受け入れられる人が来るにしても、一方的に自慢されるのは良い気分がしないだろう。

七海はタンスの前で悩み、取っ替え引っ替え人形を手を取っては元に戻すと言うのを繰り返す。

「うににに……難しい……」

タンスの前で人形選びに苦心する事暫く。しばらく七海はようやく、オフ会に持っていく人形を決めた。

持っていくのは、最近カスタムし終わったばかりの人形と、初めてカスタムをして、その後何度も手を加えている人形の二体。

片方は今洋服を着せ替えたばかりでオフ会の準備が出来ているけれども、もう片方は少し季節外れの服を着せられたままだ。なので、七海は早速もう片方の人形も、温かい今の季節らしい服装に着替えさせようと、人形の服が入っているケースに目をやった。

第二章 睡の場合

ある休日、細長い大きめのバッグを肩から掛けた一人の女性が、電気街から少し離れた駅の入り口に立っていた。

彼女の名前は森下睡。今日は中学の時から仲の良い、泉岳寺ステラという女性との待ち合わせでここに来ているのだ。

駅の入り口に到着して数分、改札へと続く階段の下から、バイオリンケースを手に持った女性が登ってきた。

その女性に、睡が声を掛ける。

「ステラ、お疲れちゃん」

「よっす睡。もしかして待たせちゃった？」

「ううん、私も今来た所」

ステラと合流した睡は、早速お昼ご飯を食べに行こうと言う話を出す。

その言葉に、ステラがポケットから地図を印刷した紙を出し、このお店だよ。と睡に確認して、二人一緒に歩き出した。

待ち合わせをしていた駅から数分歩いた所に有る、黒っぽい内装で照明を少し落としている飲食店。二人の今日の目的はここだ。

この飲食店は個室があり、人目を気にせず食事や話が出来るのだ。

早速店員に個室へと通して貰い、メニューを見る二人。

「何食べる？」

「うーん、そうだなあ。」

あ、この鶏飯けいはんって言うのが二人で食べられるみたい。これにしない？」

「そうだね。それで、足りなかったらまた別の物頼もう」

二人は食べ物を決め、飲み物もそれぞれ選んだ後に店員を呼び、注文する。

そして、店員が個室から下がった所で、ステラが睡に言った。

「で、どんなお人形買ったの？」

大きいお人形って聞いたけど、見たいな」

その言葉に、睡は照れながら、持って来た大きな鞆を開け、中から自分の腕の長さと同じくらい身長がある、カジュアルな格好の人形を取り出して、テーブルの上に座らせる。

「へえ、綺麗なお人形だね」

予想と違う物が出てきたのか、はたまた予想すら出来ていなかったのか、驚いたような顔をするステラに、睡がはにかんで言う。

「こう言うお人形、昔から欲しかったんだ」

睡は、中学生の頃にこう言った大きな人形が有るのを知り、ずっと憧れていた。

けれども、中学生の頃は勿論、高校生になってからもバイトが禁止だったので、人形を買う為のお金を貯める為にバイトが出来るようになったのは、大学に入ってからだ。

子供の頃から小さい着せ替え人形が好きではあったのだが、改めてこう言った綺麗な人形を目にしてしまうと、どうしても欲しいと言う気持ちを抑えられなかったのだ。

睡が持って来た人形に興味深そうな視線をやるステラに、そっと人形を渡すと、ぎこちない、けれども丁寧に扱おうとしているのがわかる手つきでじっくりと人形を動かしている。

「おお……すごい。結構重いね。」

こんな綺麗な人形、睡みたいいな人形好きにはたまらないだろうね」
「まさかステラがそんな事言うなんて思わなかったな。」

もっと興味無くスルーされちゃうかなって思ってた」

「まあ、正直言うとうちで買おう気にはならないけど、このお人形がすごいのはわかるよ」

くすくすと二人で笑い合い、ステラの手から人形を返して貰った睡は、人形の髪の毛を手で軽く整えてから、また鞆の中へ戻す。

それから、今度は睡がステラに訊ねた。

「そう言えば、この前大きな石買ったんだって聞いたけど、どの程度大きい石買ったの？」

「うん、正直言うて家に帰ってきてから自分で自重した方が良いと思った程度の物かな」

そう言うてステラは、バイオリンケースをテーブルの上に乗せて開く。

その中に収められているのは、バイオリンでは無く、夥しい数の石。

ステラはケースの丸く膨らんだ部分に収まっている、握り拳よりも大きな石を取り出し、睡に見せる。

「え？ この白い石はなんて言うの？」

初めて見るような石に睡がそう問いかけると、ステラは嬉しそう

な、少し困ったような笑顔で答える。

「オパールだよ。こんな大きいのもうそう無いと思ったら、我慢出来なくてね」

「そうなんだ。でも、綺麗な石だね」

その大きなオパール以外にも、ケースの中に入っていた石を幾つか眺め、そうしている内に料理が運ばれてきたので、二人は荷物を一旦しまい、食事を始めた。

幾つかの器に盛られた具材を、ご飯の上に乗せ、だし汁をかけて食べつつ二人は取り留めのない話をする。仕事の話や、学校の話、それに、最近なかなか会えない二人の友人の話。

「そういや、あの二人とは職場以外では余り会わないね。」

うちで買い物してつてくれるのは嬉しいけど、偶にはまた四人でどこかに遊びに行きたいね」

「そうだね。本屋さん巡りでも良いし、アクセサリーのパーツ屋さん巡りでも良いし」

暫くそう言った話をした後、ふと、睡が思い出したようにこう言っ

た。

「そう言えば実はね、私、最近お人形のSNSに入ったんだけど、そのSNSの人が開催するって言うオフ会に参加してみたいなって、思ってるんだ」

「へえ、オフ会ねえ」

「なんか、色々なお人形を持ち寄ってって言う感じのオフ会みたいだから、それに参加すれば色々なお人形を間近で見る機会が有るかなって。」

あと、お人形好きの人と交流したいって言うのも有るし」

睡の話を、ステラは嬉しそうな顔をしながら、頷いて聴く。

折角機会が有るなら、同じ趣味の人と交流を持った方が良い。とステラは言う。

それから、付け加えるようにこう言った。

「ただ、オフ会に参加するのは良いけど、ナンパ野郎には気をつけるんだよ」

「大丈夫。ナンパ禁止のオフ会だから」

「そっか、なら良いんだけどね」

ステラの、背中を押してくれるような言葉に睡は安心を覚え、微笑む。

実は、オフ会に参加したいと思っでは居たのだが、実際に参加する勇氣がなかなか持てなかったのだ。

睡が人形のSNSを始めてから、何度かオフ会の告知を見ていたのだが、どうにも人形趣味を始めてから履歴の長い、その道に精通した人で無いと参加してはいけないのでは無いか。と言う不安があった。

睡が持っているような大きい人形のオーナーで集まるオフ会というものもあるにはあったのだが、やはり飛び込む勇氣が無かった。

けれども、今度開催されるオフ会は、何となく初心者でも入りやすい気がしたのだ。

オフ会の話をして居る間にも鶏飯を食べ終わり、やっぱり少し物足りないね。等と言い。

二人は追加のメニューを選ぶ事にした。

ステラと一緒にの食事と、ウィンドウショッピングも終え、家に帰ってきた睡。

早速、居間に一台だけ置かれているパソコンを使って、オフ会の参加申し込みをした。

オフ会の参加表明をしているのは、睡が一人目だ。

どんな人がオフ会に集まるのか、期待と不安が膨らんできたけれど、まず主催がどの様な人形を持っているのかを見る為に、睡は主催のページを確認しに行った。

それから二週間と数日が経ち、オフ会の主催から当日の概要と、緊急連絡先のメールが届いた。

そのメールを見て睡は、ああ、本当に自分はオフ会に参加するのだと、そう言う気持ちでいっぱいになる。

メールを何度も何度も確認し、睡は早速、オフ会当日に持っていく人形の準備をする。

人形の準備と言っても、小さい頃に遊んでいた着せ替え人形はもう手元に無いので、自分で買った大きな人形以外に選択肢は無い。

当日への期待を膨らませながら、睡は何着か有る人形の服を見て、どれを着せようかと悩む。

カジュアルなブラウスとパンツ、少しダークなイメージのブラウスとコルセットスカート。

両方着せてみて、睡は折角のなのだからおめかしした方が良いだろうと、コルセットスカートを着せて、来たるべきオフ会の為に、人形を鞆の中に入れた。

第三章 正の場合

ここは、繁華街にある英国風パブ。

暖色の照明に照らされた店内の一席に二人組の男性が座っていた。

「ビールを片手に机に突っ伏す男性が、向かい側に座る男性に言う。
「勤^{つと}め、また彼女に振られちゃったんだよ」

「正兄ちゃん、その台詞、本日十回目な？」

彼女に振られたと言っているのは、普段雑誌のモデルを仕事としている寺原正。愚痴を聞いているのが弟の勤だ。

実は、今日は正が彼女とのデートをしている日だったのだが、デートの途中で彼女が怒り出し、振られてしまったのだという。

勤としては、兄の正が振られる度にこうやって飲みにつき合わされるので、そろそろこう言う話にも慣れてきた。

何で振られたんだろう、なんで振られたんだろう。とビールを飲みながら繰り返す正に、勤はミントの葉が浮いたモヒートを飲みながらこう訊ねた。

「正兄ちゃん、もしかして今日、新しいカエル買った？」

「え？　なんでわかんの？」

勤の問いが図星だったらしく、正は持っていた紙袋の中から、パックされたクリアブルーのカエルの人形を取り出す。

「これ、新作なんだよ。」

それで、今日デートのついでにこのカエル買おうとしたんだけど、そして彼女がすごい怒り始めてさ。

何でだろうなあ……」

「おう」

そう正は言うが、勤には正が振られた理由が何となくわかっていた。

今までの彼女の時もそうだったのだが、大体正が集めているこのカエル人形の収集に呆れて、別れ話を切り出すのだ。

正は、新作のカエル人形が出る度に、デートのついでと言って販売店を訪れる。

その店は人形に興味の無い人からすれば退屈な物のようで、ついつい入り浸る正に愛想を尽かしていくのだ。

中には、正にカエル人形を処分しろと言ってきた彼女も居たのだが、そ

う言った女性は正の方から、お断りだ。と言って、別れてしまっていた。
「いいじゃん、カエルかわいいじゃん……」

何がいけないんだよ……」

「そうだな、デート中に彼女ほっぽってカエルにかまけてるのがいけない」

勤の返しに正は、彼女だってデート中に自分をほうってアクセサリーや洋服に夢中になっている。と主張する。

どっちもどっちだなと勤は思ったが、口には出さずにモヒートのおかわりを買いに行った。

勤を散々付き合わせ、なんとか歩けるといふほどにまで酔った正は、大事そうにカエル人形の入った紙袋を抱えて、住んでいるアパートのドアを開ける。

ワンルームでは有る物の、少し広めの部屋。

その部屋に置かれた五段組の本棚は、下二段に本が、上三段に今日正が買ってきたような、スリムな体に円盤形の頭を乗せたカエル人形が並べられていた。

部屋の中に入った正は、紙袋の中からカエル人形の入ったパックを取りだし、開封する。

「はあ……」

人形の話が出来る知り合いが欲しい……」

同志が身近に居ない寂しさに肩を落としながら、今日早速買ってきたクリアブルーのカエル人形を棚に追加する。

暫くの間、かわいいのに、かわいいのに。とブツブツ呟きながらカエル人形と視線を合わせていたが、ふと思い出したようにスマートフォンを取り出した。

「そう言えば、SNSでオフ会の募集かかってたよな」

正が言っているSNSというのは、人形の写真を展示するのがメインの、人形の同志が集まるSNSだ。

今までなかなか参加するきっかけが無かったけれども、最近見掛けたトピックスで、気軽に参加出来るようなオフ会の参加者募集がかかっていったような気がする。それを思い出した正は、スマートフォンでSNSを開き、オフ会のトピックスを見た。

どんな種類の人形でも構わないというような旨が書かれていたので、

正が集めているカエル人形を持参しての参加も可能だろう。

このままカエル人形の良さをわかってくれる人が周りに居ないままなのは嫌だ。そう思った正は、オフ会の参加表明を書き込んだ。

そして翌日。仕事先に出勤する間、正は真っ青な顔をしていた。

二日酔いという訳では無い。昨晩、ついついオフ会の参加表明をしてしまったが、その事を思い出して不安に襲われているのだ。

そもそも正が今までオフ会に参加しなかった理由というのは、少し閉鎖的な印象がする人形愛好家の輪に飛び込む勇気が無かったからだ。

気軽に参加出来そうだと思ったのは、酔った勢いだったのかも知れない。そう思えてしまい、オフ会の参加表明を取り消そうかどうか、ついつい考えてしまう。

けれど、カエル人形の良さをわかってくれる人が周りに居ないのが寂しいというのも事実なので、もうこのまま、玉砕覚悟でオフ会に参加しても良いのでは無いかと、自分に言い聞かせた。

「勤く。飲みにつき合ってくれよ」

『別に良いけど二日連続で何があったん？』

仕事が終わった後、正はスマートフォンで勤に電話をかける。

状況がわからないと言った様子の勤に、正は待ち合わせ場所を伝えて通話を切った。

それから一時間ほど経って。正と勤は、昨日入った英国風パブに居た。

正はビールを、勤はモヒート注文した。

何故今日勤を呼んだか。正はその説明をする。その理由は、昨晚参加表明したオフ会だ。

今朝電車の中で、玉砕覚悟でオフ会に参加するという決意を固めはした物の、不安が尽きないのだ。

「俺、オフ会に参加しても大丈夫かな……」

主催や他の人に迷惑がられたりしないかな……」

今まで全く人形の愛好家と交流を持ていなかったせいかな、正は頻りに不安を口にする。

暫く正の話を頷きながら聞いていた勤が、テーブルの上にグラスを置いてこう言った。

「初めての事で不安があるのはわかるけどさ、そんな迷惑がられるって心配しすぎるの、主催に失礼じゃ無いか？」

「え？　なんで？」

「だって、主催はみんな楽しんでむつもりで募集かけてるんだろ？」

正兄ちゃんが悪い事考えてるならともかく、それでも無いのに迷惑が
る気なんて無いと思うんだけど」

勤の言葉で、正の中の不安が少し和らぐ。

そうだ、何もしない内から迷惑がられるなんて考えるだけ損だ。そう
思った。

「そっか、そうだよな。」

勤はコミュ力高いな」

「正兄ちゃんがやや低いだけだぞ？」

「ひどい」

その後、勤に背中を押して貰えた正は、勤と一緒にほろ酔いになる
程度に飲んで。

改めてじっくりとオフ会の詳細を確認する為に部屋へと帰っていった。

部屋に帰りスマートフォンを握る正。

改めてオフ会の詳細を確認しているのだが、特に問題はなさそうだ。うっかり参加条件をまともに読まずに参加表明をしてしまっていたので、条件に引っかかるようだったら、参加を辞退しようと思っていたのだ。

けれど、条件はそんなに厳しい物では無く、むしろ今までに募集がかけられていたオフ会よりも、親しみやすそうな物だった。

ナンパ行為禁止という条件があるので、女性が多いであろう人形のオフ会に男の自分が参加したら不安がられるかも知れないと思ったが、そもそも男性の参加も視野に入れているから、敢えてこう言う条件がある訳で。

それを考えると、男である自分が参加する事も許されているような気分になった。

「おお……なんかすごい楽しみになってきた」

参加表明をして居るのは、正と主催を入れて三人しか居ないが、も

しこの三人だけでも、人形についての話が出来るとなら参加する価値がある気がした。

正は来るオフ会の為に、どのカエル人形を持っていこうかと思案する。

公園でブルーシートを敷いて行うというピクニック形式だから、全部持っていくのは難しいだろう。

今朝の不安はどこへやら。正は期待を膨らませて頭を悩ませた。